

反転授業やペアでの議論など、対面での手法をオンラインでも継続。ICTツールの活用でメリットを感じた手法も



松岡 亮二
留学センター 准教授

「学校教育と不平等 01」は、全学部全学年を対象としたグローバルエデュケーションセンターの設置科目だ。この春クォーター科目は日本語で授業が行われ、同じテーマについての夏クォーター科目は英語が使用言語となる。日本語と英語による科目両方の履修、授業中の積極的な参加、授業外の課題量が多いことの 3 点を前提としているので、学習意欲の高い学生が集まっている。担当する松岡亮二准教授は、オンライン授業でも、議論を中心とした対面授業での進め方を継続したいと、Waseda Moodle と Zoom の機能を活用している。

反転授業に Moodle の小テストを活用。グループ分けはブレイクアウトルーム機能で効率的に

もともと是对面の授業だが、コロナ禍で 2020 年度春クォーターは Waseda Moodle と Zoom を使用したオンライン授業になった「学校教育と不平等 01」。オンライン化にあたって松岡准教授は、「この科目は学生授業アンケートの評価と満足度が高く、授業中の活発な議論と最低文字数を大幅に超えるレポート課題の提出があるなど学生の極めて強いエンゲージメントがあったので、これまでのやり方をできる限りうまくオンラインに置き換えるための工夫をしました」と語る。対面の授業では、毎回のトピックについて、論文を読む、小テストを受ける、講義を聞く、筆記課題に対して手書きで回答を書く、ペアで議論をする、議論に基づいて手書きで回答を追記・推敲する、全体で議論をする、授業後にレポートをタイプしオンラインで提出する、追加資料をオンラインで読む、他の学生が書いたレポートをオンラインで読むなど、多様な形態の学習活動を設定。それぞれ、読む、聞く、考える、手を動かす、（ペア議論時に席を変えるために）立ち上がる、（相手の目を見ながら）声に出す、といった異なる身体性を伴う活動であることを意図しているという。これらの複数の感覚を動員する異なる形態の学習活動を、オンラインでも可能な限り再現した。

「元々反転授業を取り入れていて、対面のときは授業の終わりに印刷した課題論文を配布し、次の授業の冒頭でその内容についての正誤問題の小テストを実施していました。オンライン授業では Waseda Moodle を活用。課題論文はダウンロードできるようにし、次の授業までに Moodle で小テストを受けることができるように設定しました。」

対面での小テストは 1 度だけだったが、Moodle では満点を取るまで何度でも受験可能で、毎回の受験後に、採点結果が自動で提示される。誤答にはヒントが表示されるようにして、学生が自分で課題論文を読み直し、どこをどう誤解していたのかを見つけるように促す。

この小テストの目的は、点数で学生を評価することではなく知識の定着にあるという。「Moodle の小テストでは、間違えたら繰り返し論文を読み直すことになります。正誤問題でも回答時間が短く、論文をしっかり読んでいないと間違い易い設問にしてあるうえ、受験の度に問題の順番がシャッフルされる設定にしているため、ちゃんと理解していないと満点は難しいです。出題の順番が毎回異なることで、前回正解でも理解が不安定な項目の復習になります。知識の定着という意味では、オンラインのほうがより効果的だと思いますし、教員としては小テスト作成には時間を使いますが採点と点数入力の作業が減ったので総合的には効率性が向上したといえます。採点ミスの可能性もなくなります。」

授業では、主に筆記と議論によって専門知識の複眼的理解を目指す。学生は提示された議題に対して手書きで回答を書き出し、メモを取りな

がらペアで議論し、その後も一人で回答の追記や推敲を行う。この一人で考えベンを動かして言語化する、他者に分かるように口頭で説明する、再び一人で手書きの追記・推敲によって思考を深める、というサイクルを 3 回繰り返す。オンライン授業では、Zoom のブレイクアウトルーム機能を用いてペア議論を行った。

「対面授業では、ペアが決まるまでざわざわする時間がありましたし、毎回違う相手にするよう伝えても話しやすい相手を選ぶケースがありました。Zoom のブレイクアウトルームではランダムにペアを作ることができますし、前週のレポートの内容を考慮して、私が意図的に特定の議論が盛り上がりそうなペアを作ることできます。3 回のペア議論の相手を探す時間を省くことができたので、毎回の議論の時間を対面のときより長く取ることができました。時間の使い方としても効率的ですし、毎週のレポートを見る限り、ペア議論を通して自分で言語化する時間が増えたことで、知識の理解が深まった可能性があります。」

上限 30 名の演習科目なので最多 15 組のペアができる。松岡准教授は 2 台のパソコンからログインして各セッションを順番に回り、学生の議論の様子を確認し、議題の難易度と議論の活発度に応じてペア議論の時間を延長することもあったという。定期的に残り時間を全体へのメッセージとして送ることで、一人が話しすぎてしまうことも防止する。なお、対面授業時は小テストへの学籍番号と名前の記入を出席の記録として利用していたが、Zoom は入室ログをダウンロードできるので管理が効率的になったという。

オンライン授業なら都合のよい場所から授業に参加可能。学生にも教員にもメリットがある

また、オンライン授業でよかった点として、授業に参加しやすくなったことを挙げる。「教室まで来る必要がなくなり、就職活動やインターンシップなどで以前はキャンパスまでの移動時間を取ることができず仕方なく欠席していた学生も、授業の時間帯だけ確保できれば、外出先のカフェなどからも出席できるようになりました。私自身、委員をしている内閣府の会議の終了時刻から授業開始まで 30 分しかなかったのですが、霞が関で会議室を借りることで授業を問題なく行うことができて非常に便利でした。」

一方、人間関係を築くという面では、現時点ではオンライン授業には課題があるという。「対面授業のときには、ペアや全体での議論とレポート課題のオンライン共有を繰り返す中でクラスに一体感が生まれ、授業の前後に雑談をする機会もあるので、学期が終わる頃には学部や学年の枠を超えて友達ができていました。Zoom の授業ですと、前後の立ち話や一緒に帰ることができません。授業時間の 30 分ぐらい前から Zoom の部屋は開けてあって、早めにログインしている学生も多いです

が、たくさん人がいるところで雑談するのは難しいようです。これらは効率化の代償と言えるかもしれません。」

ただ、この点については「慣れ」の部分もあるのではないかと松岡准教授は考えている。「まだ過渡期にあるだけで、誰もが、オンライン上でも気軽に人と話すようになってくれば改善するのではないでしょう

か。」
オンライン授業では、教員の「熱意」が伝わりにくいと感じている。そこで、Zoom の授業では対面のときより身振り手振りを大きくする工夫もしているそう。一方、Zoom での講義中は、対面の授業より周りが静かで私の声しか聞こえません。ラジオっぽいか、自分だけに話しかけているという親近感が湧くので、そこはオンライン講義のよい点ではないでしょうか。それと Zoom だと全員の名前が表示されるので、まだ名前を記憶していない時点でも“先ほど〇〇さんが挙げた例のように・・・”と議論を発展させるときに名前に言及できるのはオンライン授業の強みです。面白い論点を挙げた学生の名前でファイル検索して以前のレポートを開いて言及することもできます。また、Waseda Moodle のアナウンスメント機能を使って科目の内容と関連する時事問題や私がメディアに寄稿した記事などを送って関心を共有することで熱意を伝えようと努めています。」

オンライン授業でメリットを感じた取り組みは、今後の対面授業にも取り入れていく

今後も ICT を積極的に活用していきたいと松岡准教授。「対面授業が復活しても、ICT ツールを使ったほうがよい点は、継続していきます。たとえば、事前に課題論文を読み、小テストを受け、基礎知識を定着したうえで授業中は議論中心にする、という反転授業の効果を上げるために、今後も Moodle の小テスト機能を使っていきたいです。授業中に小テストを実施しない分、授業中にしかできないことである同時双方向の議論の時間を増やすことができます。また、議論でペアを作る際には、何度も話した相手だと共通認識ができてしまっても思考を深める言語化として効果的ではないので、対面授業に戻っても ICT を使うことで無作為に割り振りたいと思います。ペアを選ぶ時間も削減できるので効率的です。」

コロナが完全に収束しないうちは、対面授業になっても通学をためらう学生もいるかもしれない。「そういう場合には、対面を基本としながらも、オプションとしてオンラインでも参加できるようにしていけたらと思います。先ほども触れましたように、就職活動などでキャンパスまで移動する時間がなくても、授業への参加が可能になります。海外のインターンなどでも時差はありますが出席できるのはオンラインの利点ですし、他の学生にとってもよい刺激になりそうです。」

ところで、今回の科目に限らず、松岡准教授が利用していて、他の教員にもぜひ使ってほしい ICT ツールがあるという。

「それは、Waseda Moodle の剽窃チェッカーである「Turnitin」機能です。学生が自分自身でレポートを書かなければ教育効果は期待できません。Waseda Moodle から提出したレポートと同一の表現があれば、早稲田大学に提出されたレポートと同一表記あり、と表示されます。すべてのレポートがデータベースに登録されれば、全学でレポートの使い回しができなくなりますので、あらゆる科目で導入をお願いしたいです。このような剽窃チェックの利用と具体的事例を学生に示すことで、剽窃を未然に防ぐこともできるようになると思います。」

「学校教育と不平等 01」授業の流れ

